

2023年度 3月修了 修士論文

中国ボディビル界における黒人運動能力神話の探究：  
質的研究

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科  
スポーツ科学専攻 スポーツ文化研究領域

5022A090-1

劉 永欣

研究指導教員：川島 浩平 教授

# 目次

第一章 問題の所在と本研究の目的.....	2
第二章 先行研究の検討.....	4
2.1 ボディビルダーにおける人種ダイナミクス.....	4
2.2 黒人ステレオタイプ.....	5
2.3 ステレオタイプの影響.....	7
2.4 まとめ.....	8
第三章 方法論.....	9
3.1 質的研究：主題分析.....	9
3.2 参加者の選択.....	9
3.3 データ収集プロセスと分析.....	11
3.4 まとめ.....	12
第四章 結果.....	13
4.1 問題①：人種はスポーツにおける個人の成功に影響を与えると思うか？.....	13
テーマ①：教育（10/14）.....	13
テーマ②：メディア（14/14）.....	14
テーマ③：リアル体験（4/14）.....	14
4.2 問題② 人種はボディビルにおける個人の成功に影響を与えると思うか？.....	15
テーマ①黒人ボディビルダーの割合（14/14）.....	15
テーマ②リアル競技の経験.....	16
4.3 挑戦.....	16
第五章 結論と考察.....	18
引用・参考文献一覧.....	21
謝辞.....	24

## 第一章 問題の所在と本研究の目的

世界的なフィットネス文化の隆盛を背景に、プロポーションや脂肪のつきにくさ、メリハリのある体型、スリムな体型など、理想的なボディ・スタンダードが形成されている<sup>1</sup>。この標準に影響され、筋力トレーニングで体を鍛え直そうとジムに通う人が増えている。アメリカン・ヘリテージ・ディクショナリー (American Heritage Dictionary) では、ボディビルを「特定の食事と身体運動を伴うトレーニング、特に競技のための重量挙げ」と定義している。しかし、この定義は排他的なものではなく、実際、定期的な筋力トレーニングによって体型を変えようとする人は誰でもボディビルダーとみなすことができる<sup>2</sup>。

ボディビルの起源は、自称「ストロングマン」が欧米に出現した 19 世紀半ばにまで遡ることができる。これらの人々は、人前でその肉体と強さを披露するだけでなく、学校の設立、トレーニングシステムの出版、筋力トレーニングコースの提供など、体育の発展にも貢献した。トレーニング用具の開発・販売にも大きな役割を果たした<sup>3</sup>。この時代の中心人物であり、近代ボディビルの父として知られるユージン・サンドウは、1901 年に最初の大規模なボディビル大会を開催し、それまでの重量挙げ競技のショーアップとは一線を画したボディビルを確立した。

初期のボディビルは主に白人男性によって支配され、古代ギリシャの彫刻や西洋の優生思想の影響を受け、白人の筋肉が理想的な身体像と考えられていた<sup>4</sup>。黒人選手は 1940 年代からボディビルに参加するようになったが、当初は人種的な偏見によって、このスポーツにおける彼らの活躍は妨げられた。最初の黒人ボディビル・チャンピオンが登場し、転機となったのは 1960 年代後半になってからである。その後、黒人ボディビルダーはコンスタントに優勝するようになり、過去 30 年にわたってこのスポーツを支配していると認識されてきた<sup>5</sup>。

ベイカーとホートン (2003) は、あるスポーツにおいて特定の人種グループが優位に立つと、好奇心や分析が高まることが多いと述べている<sup>6</sup>。黒人のボディビルダーがこのスポーツでますます目立つようになったことで、人種に基づく生来の運動才能に対する好奇心が高まっている。しかし、ボディビルにおける人種的ステレオタイプを具体的に取り上げた研究は、バスケットボールや陸上競技など他のスポーツに比べるとまだ限られている。

ボディビルに関する最近の研究では、現代のボディビルには非白人男性に対する歴史的

---

<sup>1</sup> Ferdinando Cereda, 'Transforming Bodies, Transforming Society: The Cultural Impact of Fitness', *PEDAGOGIA OGGI*, 21.1 (2023), 272–79.

<sup>2</sup> Alan M. Klein, 'Pumping Irony: Crisis and Contradiction in Bodybuilding', *Sociology of Sport Journal*, 3.2 (1986), 112–33; Ben Agger, Debra McBrier, and Martin Danahay, 'A CRITICAL SOCIOLOGY OF BODYBUILDING', 113.

<sup>3</sup> Ruud Stokvis, 'The Emancipation of Bodybuilding', *Sport in Society*, 9.3 (2006), 463–79.

<sup>4</sup> John D. Fair, 'Eugen Sandow and Eugenics', *Sport in History*, 2023, 1–22; Dimitrios Liokaftos, 'From "Classical" To "Freaky": An Exploration of the Development of Dominant, Organised, Male Bodybuilding Culture', 253.

<sup>5</sup> Liokaftos.; Maria Wyke, 'Herculean Muscle! : The Classicizing Rhetoric of Bodybuilding', *A Journal of Humanities and the Classics*, 4.3(1997), 51–79.; Ryan Murtha, Conor Heffernan, and Thomas Hunt, 'Definition Diets and Deteriorating Masculinity? Bodybuilding Diets in Mid-Century America', *Global Food History*, 7.1 (2021), 71–91.

<sup>6</sup> Baker, J., Horton, S, 'East African running dominance revisited: A role for stereotype threat?', *BMJ Publishing Group Ltd & British Association of Sport and Exercise Medicine*, 37(2005), 553–555

な偏見がなく、さまざまな人種をより公平に表現していることが示唆されている<sup>7</sup>。国際ボディビル連盟の機関誌『FLEX』を調査したところ、白人ボディビルダーと非白人ボディビルダーが同じ割合で誌面の写真の中心に登場していることがわかり、この視点を裏付けているようだ<sup>8</sup>。一見すると、これは現代のボディビルにおける人種の平等を示しているのかもしれない。しかし、より深く分析すると、これらの非白人アスリートは圧倒的に黒人であり、黒人と白人の二項対立が浮き彫りになり、Aoki (1999) が指摘するように、ボディビルにおいてより具体的な人種差別に直面しているアジア人を含む他の人種的背景を持つアスリートの表現が欠如していることが明らかになる<sup>9</sup>。

このギャップに対処するため、本研究では主に、中国のボディビルにおける人種神話の存在と認識を探る。黒人はナチュラル・ボディビルダーである」というステレオタイプを、中国人ボディビルダーがどのように受け止め、どのように接しているかを理解しようとするものである。これまでの研究では、黒人や白人のコミュニティにおけるこのような人種的神話の影響について幅広く検討されてきたが、アジアの文脈、特に中国人ボディビルダーにおけるその影響や認識については、まだ十分に検討されていない。本研究では、中国人ボディビルダー・コミュニティの参加者 14 名とのインタビューを通じて、「黒人はナチュラル・ボディビルダーである」という人種神話がどのように認識されているのか、また、こうした認識が中国人ボディビルダーたちのボディビル参加にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。

---

<sup>7</sup> Dyer, R. (2017) *White: Twentieth Anniversary Edition* London & New York: Routledge; Fair, J.D. (2015) *Mr. America: The tragic history of a bodybuilding icon* United States: University of Texas Press

<sup>8</sup> Peter Gavigan: 'Whose body is it anyway? 'Race', Gender and Representation in Bodybuilding' (2022)

<sup>9</sup> Douglas Sadao Aoki, 'Posing the Subject: Sex, Illumination, and "Pumping Iron II: The Women"', 2023.

## 第二章 先行研究の検討

本章は、ボディビルにおける人種ダイナミクスに関する文献のレビューから始まる。この問題を論じている文献の量は限られており、主に黒人と白人の二分法に焦点を当てていることは注目に値する。しかし、この限界こそが、ボディビルにおけるより広範な人種ダイナミクスを掘り下げ、探求する必要性を浮き彫りにしている。次に、天性のアスリートという「黒人神話」のような人種に関連したステレオタイプを探り、それらがボディビルというスポーツとそのアスリートにどのような影響を与えているかを検証する。この探求は、中国人のボディビルダーが「黒人神話」という概念をどのように認識し、どのように相互作用しているかという、その後の調査の重要な文献的裏付けとなるだろう。

### 2.1 ボディビルダーにおける人種ダイナミクス

ボディビルにおける人種ダイナミクスに関する限られた研究によれば、ほとんどの研究者（ダイアー）は、ボディビルにおいて人種的平等がよく表れていることに同意しており<sup>10</sup>、フェアは『ミスター・アメリカ』の中で、この最も象徴的なボディビル大会の歴史を振り返り、黒人のボディビルダーが差別されていたかどうかという問題は事実上未解決であると述べている。当時の大会における白人の肉体の理想に対する判断基準から、審査員は黒人のボディビルダーの肉体の「客観的な構造的欠陥」を指摘するようになったが、同時に黒人のボディビルダーは多くのサブプライム大会を受けていた。当時の白人の理想的な判断基準は、審査員が黒人ボディビルダーの肉体の“客観的な構造的欠陥”を指摘することを許容していたが、同時に、当時の黒人ボディビルダーは、多くの二次的なボディビル大会で優勝しており、ある種の“客観的な身体的欠陥”を理由に差別されたのは、通常、国のイメージを代表する大きな大会だけであった<sup>11</sup>。

リオカフトは、いわゆるボディビルの博覧会であるミスター・オリンピアの審査形式について論じ、IFBBが主催するミスター・オリンピアが、今日ミスター・アメリカに取って代わって最も象徴的なボディビル大会となることができた主な理由の一つは、ミスター・オリンピアで採用されている「筋肉のための筋肉」(Muscle For Muscle`s Sake)の形式にあると指摘する。ミスター・オリンピアの「筋肉のための筋肉」審査モデルは、ボディビル大会の唯一の基準として筋肉または身体の美学を定義するもので、過去に存在した人種的偏見の余地をなくし、より多様な競技者グループへの門戸を開いたと考えられている。

ボディビルと人種について語る中で、クラウディア・シッパートはボディビル競技におけるタンニングの重要性を指摘する。黒人のボディビルダーは、日焼けした肌がもともと黒いため、肌の色を濃くするために追加のペンキを使う必要がなく、審査員の厳しい目に

<sup>10</sup> Liokaftos. ; Dyer, R. (2017) White: Twentieth Anniversary Edition London & New York: Routledge; Fair, J.D. (2015) Mr. America: The tragic history of a bodybuilding icon United States: University of Texas Press

<sup>11</sup> Fair, J.D.

さらされたときに、黒いペンキで隠されてしまうよりも、筋肉の質感やディテールをよりよく見せることができるのだ<sup>12</sup>。一方、ピーター・ガビガンは、黒人は「硬すぎる、強すぎる、肉体的すぎる」という人種的ステレオタイプは、競技ボディビルのエートスとよく合っていると指摘したが、それ以上の議論はしなかった<sup>13</sup>。

今日のボディビル界では、黒人選手が優位を占めており、これは上記のように、人種的不平等が克服された結果、ボディビル競技における人種的平等が示され、シフトが起こったと多くの研究者は考えているが、青木はアジア系ボディビルダーの存在に注目し、「ボディビル界では人種差別は常にイレギュラーな問題であったが、最近ではアジア系選手に焦点を合わせている」と指摘する<sup>14</sup>。青木の指摘を直接的に検証する研究はまだないが、ブーニー・パング 2022 年によるアジア人ボディビルダーの質的研究から、その一端を垣間見ることができる。それによると、アジア人のボディビルダーは身体的才能が低いと思われがちで、欧米の競技者はアジアで開催されるボディビル大会に出場することを軽蔑し、たとえ優勝したとしても、その勝利に値しないとみなす傾向があるという。しかし、アジア人／中国人ボディビルダーがアジアで開催されないボディビル大会で優勝すると、彼らはより尊敬に値するとみなされる<sup>15</sup>。

ベイカーとホートン（2003）は、あるスポーツにおいて特定のエスニックグループが優位に立つと、より多くの好奇心や分析が生まれる傾向があると指摘している<sup>16</sup>。今日のボディビルでは、黒人のボディビルダーが目立つことは、アジア人のボディビルダーに対する認識とは対照的であるが、この認識の違いは、ボディビルにおける重要な人種的ダイナミズムを浮き彫りにしている。実際、黒人アスリートは生まれつき才能に恵まれているという考え方は、ボディビルに限ったことではなく、過去100年にわたってさまざまな分野の研究者によって探求されてきた。

## 2.2 黒人ステレオタイプ

黒人アスリートには生まれつきスポーツの才能があるというステレオタイプは、何世代にもわたって激しい議論の対象となってきた<sup>17</sup>。このステレオタイプが現代社会に蔓延していることは、議論を呼び起こし続けており、肌の色と才能、知性、個性といった生得的な特性を結びつけて考える社会の長年の傾向を浮き彫りにしている<sup>18</sup>。黒人アスリートといえば、ウサイン・ボルト、タイソン・ゲイ、マイケル・ジョーダン、コービー・ブライ

---

<sup>12</sup> Claudia Schippert, 'Can Muscles Be Queer? Reconsidering the Transgressive Hyper-Built Body', *Journal of Gender Studies*, 16.2 (2007), 155–71.

<sup>13</sup> Peter Gavigan: Jeffrey A. Brown, 'Comic Book Masculinity and the New Black Superhero', *African American Review*, 33.1 (1999), 25.

<sup>14</sup> Aoki.

<sup>15</sup> Bonnie Pang, Denise Tse-Shang Tang, and Siufung Law, 'Trans\*, Female Bodybuilding and Racial Equality: Narratives from a Hong Kong Chinese Gender-Fluid Bodybuilder', *Sport, Education and Society*, 2022, 1–13.

<sup>16</sup> Baker, J., Horton.

<sup>17</sup> Keith C. Harrison and Suzanne Malia Lawrence, 'College Students' Perceptions, Myths, and Stereotypes about African American Athleticism: A Qualitative Investigation', *Sport, Education and Society*, 9.1 (2004), 33–52.

<sup>18</sup> Clinton Woods, Perceptions of College Students on Race and Stereotypes in Athletics, Northwest Missouri State University, 7 (2013), 4-50.

アント、レブロン・ジェームズといった伝説的な選手が思い浮かぶ。陸上、バスケットボール、フットボールなどのスポーツにおける彼らの並外れた活躍は、“黒人は生まれつき運動能力が高い”という一般的な概念を補強している。しかし、この考え方はアスリート個人の非凡な才能に限ったものではなく、「黒人は生まれつき運動能力が高い」という考え方にも及んでいる。

イアン・B・カー (2010年) は、人種間の身長、肌の色、髪質などの生理学的な違いは、生まれつきの運動能力の指標ではなく、異なる気候条件への適応であると論じている。彼は、これらは生来の運動能力の指標ではなく、異なる気候条件への適応であると主張した<sup>19</sup>。

ハリソンとローレンス(2004)、ホッジら(2008)、ジェーン・P・シェルドン(2007)による研究では、アメリカの大学生の異なる人種グループの間で、生来の運動能力神話に対する根強い信念があることが明らかになった。これらの研究によると、白人の学生は一般的に、白人の運動能力の不利は社会文化的要因によるものであるとし、一方アフリカ系アメリカ人の運動能力の成功は人種的遺伝によるものであるとする<sup>20</sup>。興味深いことに、この見解は黒人コミュニティの一部でも共有されており、人種間の運動能力には生まれつきの差があると信じられている<sup>21</sup>。

2000年に出版されたジョン・エンタインの著書は、人種遺伝と運動能力に関する議論をさらに煽った。この本では、特定の人種集団が特定のスポーツで優れている理由を説明する上で、環境要因は影響力を持つものの、生得的な遺伝的差異よりもはるかに小さな役割しか果たしていないと論じている<sup>22</sup>。しかし、この議論は、遺伝、環境、運動能力の間の複雑な相互作用を単純化しすぎていると批判されている。

ハルパラニ(2004)が強調しているように、人種という概念は主に西洋社会で過度に強調されてきた社会的構築物である<sup>23</sup>。コークリーは、純粋な遺伝的・生物学的要因ではなく、文化的・社会的文脈に焦点を当て、黒人アスリートの優位性をよりニュアンス豊かに探求することを主張している<sup>24</sup>。

中国では、量的調査に基づく研究で、黒人は怠け者で知的に劣るというステレオタイプはアメリカほど浸透していないが、運動能力に対するステレオタイプは依然として中国社会にしっかりと根付いていることが示された<sup>25</sup>。李(2001)や潘(2013)といった学者は、黒人アスリートが特定のスポーツにおいて支配的な地位を占めていることを、主に生物遺伝学、過酷な生活環境下での身体進化、独特な筋骨格といった観点から説明している。“黒人は生まれつき運動能力が高いという固定観念は、広く浸透し、今もなお受け入れられて

<sup>19</sup> Ian B Kerr, 'The Myth of Racial Superiority in Sports', *The Hilltop Review*: 4. 1 (2010).19-27.

<sup>20</sup> Keith C. Harrison and Suzanne Malia Lawrence; Samuel R. Hodge et al, 'A Comparison of High School Students' Stereotypic Beliefs about Intelligence and Athleticism', *The Journal of Educational Foundations*, Ann Arbor Vol. 22, Iss. 1/2, (2008): 99-119 ; Jane P. Sheldon, 'White Americans' Genetic Explanations for a Perceived Race Difference in Athleticism: The Relation to Prejudice toward and Stereotyping of Blacks', *Athletic insight: online journal of sport psychology*.9.3(2007): 31-56.

<sup>21</sup> Hodge et al; Laura Azzarito and Louis Harrison, 'White Men Can't Jump': Race, Gender and Natural Athleticism', *International Review for the Sociology of Sport*, 43.4 (2008), 347-64.;

<sup>22</sup> ENTINE, J. (2000) Taboo: Why Black Athletes Dominate Sports and Why We're Afraid to Talk about it.

<sup>23</sup> Harpalani, Vinay. (2004). Genetic, Racial and Cultural Determinism in Discourse on Black Athletes: A Critique of Entine's Taboo and Hoberman's Darwin's Athletes.

<sup>24</sup> Coakley, J. (2001) *Sport in Society* (Boston, MA, McGraw-Hill).

<sup>25</sup> Barry Sautman, 'Anti-Black Racism in Post-Mao China', *The China Quarterly*, 138 (1994), 413-37; Kelly Liang and Philippe Le Billon, 'African Migrants in China: Space, Race and Embodied Encounters in Guangzhou, China', *Social & Cultural Geography*, 21.5 (2020), 602-28.

いる<sup>26</sup>。この支持は、運動能力に影響を与える社会文化的要因を無視しがちなグローバルな視点を反映している。

### 2.3 ステレオタイプの影響

最近の研究では、スポーツにおけるステレオタイプの蔓延がますます認識されてきている。このようなステレオタイプの影響は、特に黒人と白人という二項対立的なレンズを通して広く研究されてきたが、ステレオタイプが他の人種的背景を持つアスリート、特にアジア人アスリートにどのような影響を与えるかについての理解には、まだ大きなギャップがある。黒人と白人のアスリートに焦点を当てるあまり、運動能力や男らしさに欠けると思われがちなアジア人のステレオタイプの探求は不注意にも影を潜めてしまった<sup>27</sup>。

ルイス・ハリソン Jr. によれば、人種的ステレオタイプは若いアスリートがスポーツの目標を追求するのを妨げる可能性がある<sup>28</sup>。さらに、ジェフ・ストーン(2002)が探求したステレオタイプ脅威理論によると、否定的なステレオタイプに悩まされる集団に属する個人は、自分の能力に対する否定的なステレオタイプに直面すると、パフォーマンスが低下する可能性がある<sup>29</sup>。これは特にアジア系ボディビルダーに関連しており、アジア系ボディビルダーは「黒人神話」に関連するステレオタイプや、アジア系の運動能力に対する一般的な認識のために、独特の困難に直面している。

アリゾナ大学心理学科は、スポーツにおけるステレオタイプの原因と結果を探る研究をまとめた。その結果、黒人アスリートは人種や性別に関係なく、生まれつきの運動能力と労働倫理の評価は高いが、運動知性と感情の評価は低い傾向があることがわかった。逆に、アジア系選手は知能は高いが、生来の能力、感情、勤労意欲は低い傾向があった<sup>30</sup>。

ストーン、ペリー、デイリーは、被験者が大学バスケットボール選手のパフォーマンスを、彼らの人種に対する認識に基づいて評価することを発見した。彼らは、黒人であると認識される選手の運動能力は高いが、知性とせっかちさは低いという研究を通じて、これを実証した。逆に、白人と思われる選手は、知能は高いが、生まれつきの運動能力とスキルは低かった<sup>31</sup>。

ストーン、リンチ、ショーメリング、ダーレーは、黒人と白人のアスリートが、もう一方の人種に関連するステレオタイプなタスクを実行した場合、人種的ステレオタイプがパフォーマンスにマイナスの影響を与えることを発見した。彼らは、アジア人ボディビルダーにとって、特に伝統的にアジア人アスリートとの関連が薄いスポーツにおいて、同様

<sup>26</sup> Li Li -yan, 'Human Races and Physical Activities', The Scientific Research Office, National Head Bureau of Physical Education, (2001); 潘玉环, 浅谈黑人体育文化, 天津师范大学体育科学学院, (2013) .

<sup>27</sup> Alexander M. Czopp and Margo J. Monteith, 'Thinking Well of African Americans: Measuring Complimentary Stereotypes and Negative Prejudice', *Basic and Applied Social Psychology*, 28.3 (2006), 233-50.; Clinton Woods.

<sup>28</sup> Azzarito and Harrison.

<sup>29</sup> Jeff Thinking, 'Battling Doubt by Avoiding Practice: The Effects of Stereotype Threat on Self-Handicapping in White Athletes', *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28.12 (2002), 1667-78; Jeff Stone and others, 'Stereotype Threat Effects on Black and White Athletic Performance'.

<sup>30</sup> Clinton Woods.

<sup>31</sup> Jeff Stone, W. Perry, and John M. Darley, "'White Men Can't Jump": Evidence for the Perceptual Confirmation of Racial Stereotypes Following a Basketball Game', *Basic and Applied Social Psychology*, 19.3 (1997), 291-306.

のステレオタイプの脅威が彼らのパフォーマンスや自己認識に影響を与えるかどうかを探ることが重要であることを明らかにした<sup>32</sup>。

Harrison と Lawrence (2004) と Hodge ら (2008) も、スポーツにおける人種的ステレオタイプの影響を強調している<sup>33</sup>。彼らの研究によると、こうしたステレオタイプは根強いだけでなく、達成を阻む障壁としても作用している。これは、特にアジア系ボディビルダーに関連することであり、彼らは、スポーツにおいて、自分たちの民族集団に対する伝統的な認識と対立するステレオタイプを克服しなければならないかもしれない。

## 2.4 まとめ

本研究は、「黒人はナチュラル・ボディビルダーである」というステレオタイプに特に焦点を当てながら、中国人ボディビル・コミュニティにおける人種神話の認識について掘り下げてきた。これまでの研究では、黒人と白人のアスリートに焦点を当てた議論が中心であったが、本研究では、中国人のボディビルダーがこのステレオタイプをどのように認識し、どのように接しているのか、また、このステレオタイプがボディビルへの参加にどのような影響を与えているのかを独自に調査した。14人の中国人ボディビルダーとのインタビューを通して、このような人種的神話が、ほとんど無視されているこのグループに与える影響に光を当てることを本研究の目的としている。

既存の文献は、黒人のボディビルダーが「黒人神話」のレンズを通して見られることが多いという複雑な図式を明らかにしている。この認識は、運動能力低下というステレオタイプにしばしば直面するアジア系ボディビルダーの経験とは対照的である。本研究は、中国のボディビル・コミュニティに焦点を当てることで、このギャップを埋めることを目的とし、非西洋的文脈のボディビルダーがどのように人種的ステレオタイプを内面化し、ナビゲートしているのかについて新たな視点を提供する。

質的アプローチを採用することで、本研究は、黒人固有の運動能力というステレオタイプに対する中国人ボディビルダーの個人的な経験と認識を理解しようとした。ボディビルの世界的な広がり多様性を考えると、この調査は特に重要である。得られた洞察は、スポーツにおける人種力学のより広い理解に貢献し、伝統的な黒人と白人の物語を超えて、体力と美学が鍵となるスポーツにおける異なる人種的背景を持つアスリートの経験を検証する。

---

<sup>32</sup> Stone and others.

<sup>33</sup> Keith C. Harrison and Suzanne Malia Lawrence; Hodge et al.

## 第三章 方法論

### 3.1 質的研究：主題分析

この研究の方法論は、人間の経験の深さと複雑さを重視する研究パラダイムである質的研究に基づいている。質的研究の手法、特に主題分析のような手法は、スポーツ研究を含む様々な分野において、その多様性と奥深さが認識されつつある。本研究では、参加者の認識、信念、経験の複雑さを深く考察するために、これらの方法を用いている。

このアプローチの中心にあるのは、個人の経験はその個人的・社会的背景に深く根ざしているという認識である。そのため、本研究では、これらの経験を可能な限りありのままに捉えようと試みている。参加者自身の語りに焦点を当てることで、本研究は、彼らの人種理解と、スポーツとボディビルにおけるその影響における意味の層を明らかにすることを目的としている。このような参加者中心のアプローチは、中国人のボディビル参加者が黒人スポーツに対するステレオタイプな概念をどのように認識し、どのように相互作用しているかのニュアンスを明らかにすることを含む、本研究の広範な目的と一致している。

主題分析はこの種の研究に適したアプローチであり、これらのテーマをニュアンス豊かに探求することができる。データを体系的にコード化し検討することで、分析によって隠れていたパターンやテーマが明らかになる。このプロセスは反復的かつ内省的で、帰納的推論と演繹的推論の両方が含まれる。

この二重のアプローチにより、参加者個人のユニークな視点と、集合的な経験や社会規範を反映したより広範なパターンの両方を捉え、データの全体的な理解が確保された。本研究における主題分析は、個人的理解と集団的理解の橋渡しをするように設計され、参加者の経験について豊かで多層的な解釈を提供した。

主題分析の使用は、本研究において特に重要であった。スポーツとボディビルにおける人種とその影響に焦点を当てることは、質的な探求に適したテーマである。参加者の個人的な経験や認識を掘り下げることで、人種がこれらの分野と交差し、影響を与えている微妙な方法を明らかにすることが本研究の目的である。

### 3.2 参加者の選択

参加者の選定は、調査結果の深さと妥当性に直接影響するため、質的調査において重要なステップである。本研究では、参加者の選定に戦略的アプローチを用い、中国のボディビル・コミュニティに深く根ざした個人に焦点を当てた。男性13名、女性1名の計14名が選ばれた。この性別分布は、競技ボディビルに男性が多く参加しているという現在の人口統計学的現実を反映している。

この研究で用いられたサンプリング戦略は、ランダムサンプリングとスノーボールサ

ンプリングの組み合わせである。無作為抽出は、参加者の選択の予測不可能性と多様性を保証し、選択バイアスの可能性を減らす。スノーボール・サンプリングは、既存の参加者から将来の参加者を推薦してもらうもので、ボディビルダーのようなニッチで緊密なグループへのアクセスを得るのに特に有効である。この方法は、より伝統的なリクルート戦略ではリーチできないような人々にリーチするのに効果的であることが証明されている。

参加者は、ボディビルへの関与の度合いによって分類された：A1～A5はボディビル愛好家、A7～A10はパーソナルトレーナーまたは競技者志望者、A6、A11～A14はプロボディビルダーである。この分類は、ボディビル・コミュニティを多層的に理解し、カジュアルな参加からプロフェッショナルなコミットメントまで、さまざまな経験をカバーする。この多様性は、さまざまな参加レベルにおけるエスニシティとボディビルとの微妙な交差を探る上で極めて重要である。

匿名	年齢	トレーニング 履歴	身分
A1	27	5年	愛好者
A2	28	3年	愛好者
A3	27	3年	愛好者
A4	25	2年	愛好者
A5	30	8年	愛好者
A6	33	5年	プロボディビルダー
A7	28	4年	パーソナルトレーナー
A8	31	9年	パーソナルトレーナー
A9	29	4年	パーソナルトレーナー
A10	31	4年	パーソナルトレーナー
A11	29	6年	プロボディビルダー
A12	34	3年	プロボディビルダー
A13	41	10年	プロボディビルダー
A14	32	3年	プロボディビルダー

中国のボディビルコミュニティを対象とした本研究では、参加者の経験や認識に大きな共通点があることを確認した。異なる背景やボディビルへの関与のレベルを持つ参加者の視点が収束することで、中国のボディビル・コミュニティの集成的な認識についての理解が深まった。

これらの共通のテーマは、ボディビル界の一般的な愛好家からプロのアスリートまで、多様な人々によって提起されたものであり、このコミュニティに蔓延する文化的・社会的問題を包括的に理解することができる。参加者の視点と経験が交差することで、この集団の共通した考え方が明らかになり、そのダイナミクスに対する理解が深まる。

これらの共有された視点から得られた洞察は、中国におけるボディビルの理解に対する本研究の貢献を強調している。視点の統一に焦点を当てることで、集団の根底にあるパターンや態度の特徴を明らかにし、質的研究ならではの理解の深さを提供している。

### 3.3 データ収集プロセスと分析

本研究のデータ収集プロセスは、豊かで深みのある質的データを確実に収集するために慎重に計画された。まず参加者に連絡を取り、研究の目的、参加者の権利、守秘義務に関する詳細な情報を提供した。このような透明性は、信頼を築き、インフォームド・コンセントを確保するために不可欠であった。この2つは、質的研究、特にスポーツにおける人種のようなデリケートなテーマを扱う場合に不可欠である。

インタビューは半構造化方式で行われ、誘導的な質問と、参加者が自分の考えを自由に表現できる柔軟性のバランスが取れた形式であった。このアプローチにより、参加者が予期せぬ洞察を提供する余地を残しながら、あらかじめ決められたトピックを探ることができた。インタビューは、「人種がスポーツの成功に影響すると思うか」「人種がボディビルの成功に影響すると思うか」という2つの質問を中心に構成された。これらの自由形式の質問は、参加者が議論をリードすることを促し、自分の経験や意見を自分の言葉で共有する場を提供するためにデザインされた。

その後の質問は、あらかじめ決められたものではなく、回答者の答えに依存するものであった。このような応答的なアプローチにより、各インタビューは回答者一人一人に合わせたものとなり、その人独自の経験や視点をより深く掘り下げることができた。このような柔軟性は、会話の流れに適応し、参加者の思考の自然な進行に従うという、質的インタビューの重要な長所である。

インタビューのセッティングも、データ収集プロセスの重要な側面である。率直な議論をするためには、快適で親しみやすい環境が重要であることを認識し、参加者は好みのインタビューの場を柔軟に選ぶことができた。これには、スポーツジム、自宅、オンライン・インタビューのためのデジタル・プラットフォームなどが含まれる。参加者の好みに合わせることで、この研究は、オープンで正直な対話を助長する環境を作ることを目指した。

グループA1-A6はオンライン、グループA7-A12はジムのラウンジ、グループA12-A14は自宅というように、参加者の異なるグループが異なる環境でインタビューを受けた。参加者が自分の経験をどのように共有するかは、その環境にも影響されるため、インタビューの場が多様であることも、データの豊かさに貢献した。

各インタビューは40～60分で、長さや方向性は参加者によってほぼ決定された。各インタビューの終わりに、参加者はそのトピックについて自分の意見を十分に述べたと感じた。このような参加者主導のアプローチにより、インタビューは包括的なものとなり、重要な未調査部分を残すことなく、自然に終了した。

すべてのインタビューは、参加者の明確な同意を得て音声録音された。これは、会話のニュアンスを正確に捉えるために不可欠であった。録音は、データの完全性と信憑性を維持するために、逐語的に書き起こされた。逐語転写は、会話の内容だけでなく、間、声のトーン、感情など、会話の進め方も記録するため、質的研究において非常に重要である。

綿密なデータ収集プロセスに続いて、収集した情報の統合と分析に焦点が移った。質的研究において分析とは、単にデータを集計することではなく、むしろデータの深い意味やパターンを明らかにしようとする解釈的なプロセスである。

分析では、ボディビルにおける人種に対する参加者の認識の深さと広さを理解しようとした。これには、人種がボディビルにおける成功にどのような影響を与えるか、こう

した認識の性質とその意味合いを探ることも含まれた。また、人種と文化、社会規範、個人的経験といった他の要因との相互作用についても掘り下げた。

### 3.4 まとめ

以上より、本研究は質的調査に基づき、中国の文脈における人種とボディビルの複雑な相互関係を探求しようとするものである。参加者の戦略的選択と主題分析的アプローチによって、本研究はボディビル・コミュニティにおけるさまざまな経験から重要な洞察を掘り起こした。その結果、視点の共通性がより浮き彫りになり、ボディビル界に蔓延する集団的視点についての理解が深まった。

## 第四章 結果

インタビュー・プロセスは、2つの中核的な質問を念頭に置いて行われた。①人種はスポーツにおける個人の成功に影響を与えると思うか②人種はボディビルにおける個人の成功に影響を与えると思うか したがって、本節で紹介する分析結果のセクションでは、この順序で結果を提示し、探求する。

### 4.1 問題①：人種はスポーツにおける個人の成功に影響を与えると思うか？

インタビューの過程で、インタビュー対象者全員の最初の質問に対する回答が、「黒人神話」というステレオタイプを無批判に受け入れていることがわかった。「もちろん」、「明らかに」、「当然だ」といった言葉がよく使われ、黒人は生まれつきスポーツの才能があるという概念を、議論の余地のない常識的な概念として組み立てていた。このような傾向を認識した私は、インタビュー対象者にステレオタイプの起源を振り返ってもらいながら、この問題をさらに深く掘り下げていった。インタビューの間、より焦点を絞った調査を行うことで、私は3つの主要なテーマを特定した：教育、メディア、そしてリアル体験である。これらの要因は、回答者のステレオタイプの認識と受容に大きな影響を与えているようである。

#### テーマ①：教育

ハリソンらが指摘したように、人種的ステレオタイプを形成する上で教育機関が果たす役割は、特に体育の場において、アメリカやイギリスの研究で確立されている。問題①に対して、10人の回答者が教育場面で起こる黒人運動能力に関する言説を挙げた。中学校の体育の授業での回答者A6の経験は、この傾向を例証している：

「陸上やバスケットボールの練習の休憩時間に、体育の先生が最近の陸上大会やNBAの試合について話してくれ、黒人はもともと走るのが上手で、高くジャンプでき、楽にダンクができるとよく言っていました」とA6は振り返る。

しかし、学校での黒人のステレオタイプに関する記憶のすべてが体育と関連していたわけではないことを認識することは重要である。例えば、A13の回想は、学術的な教科書を指している：

「中学の地理の教科書には、世界を5つか3つの主要人種に分けたことが書かれていて、黒人はもともとスポーツに向いていると書いてあった」。

さらに、歴史教科書のアフリカ植民地史に関する部分も、こうしたステレオタイプを助長している。A3はこう語った：

「歴史の授業では、黒人はヨーロッパやアメリカに奴隷として連れて行かれ、強い者だけが旅を生き延びられるような過酷な環境で生活していたと習った。

回答者14人中10人が、黒人に対する固定観念の起源を語るときに、学校での記憶を思い出しているのだから、このパターンは重要である。中国のキャンパスでは黒人と直接接触する機会が少ないにもかかわらず、こうした教育の場がステレオタイプな物語を広める肥沃な土壌となっていることは明らかである。

## テーマ②：メディア

黒人アスリートに対する人種的ステレオタイプを作り出し、永続させる上でのメディアの役割は、本研究の主要なテーマであった。回答者14人全員が、特に陸上競技やバスケットボールなどのスポーツにおいて、メディアの影響が大きいことを認めている。有力なメディアの語り口は、一般大衆の認識を形成するだけでなく、黒人が本来持っている運動能力に関する固定観念を植え付ける。

黒人の生来の運動能力に関する描写は、インタビュー対象者の語りの中で孤立していたわけではない。A7の2004年アテネオリンピックの回想はその一例である：

「アテネオリンピックの110メートルハードルで劉翔が優勝したとき、テレビや新聞では、劉は黒人選手が多い中で優勝したアジアの誇りだと大騒ぎになった。」

同様に、中国初のNBA1巡目指名選手であるヤオ・ミンも、しばしば中国のメディアから国家的シンボルとして称賛されたと、A2は高校時代にNBAを観戦した思い出を振り返る：

「中国のバスケットボール解説者は、NBAは主に黒人のスポーツだとよく指摘する。黒人選手はダンクが得意で、ヤオはそれをブロックできた。」

中国人アスリートが失敗した場合、メディアの語り口は変わる。東京オリンピックでの蘇炳天のパフォーマンスについて、A10はこう指摘した：

「蘇炳天は、東京オリンピックの準決勝で9秒83を出した劉翔に続く、もう一人の傑出した中国陸上選手である。中国メディアは彼を中国人とアジア人の誇りとして称え、アジア人が人種の違いを乗り越えて“100メートルの飛翔者”になれることを証明したと主張し、最後に敗れた後も、それは失敗ではなく、アジア人として最後の舞台に立てたことは大成功だったと言うだろう」と述べている。

この調査において、14人の回答者は、特に陸上競技とバスケットボールにおける黒人アスリートに関する人種的ステレオタイプを永続させる上で、メディアが極めて重要な役割を担っていることを全員一致で認識した。メディアの語り口は、黒人の生まれつきの運動能力を強調することが多く、そのようなステレオタイプを一般大衆の心の中に強化している。

## テーマ③：リアル体験

その側面は、実際のスポーツ経験と参加に焦点を当て、スポーツにおける個人的な出会いが、スポーツに内在する人種的優位性に関する信念をどのように強めるかを強調する。インタビューの中、14人中4人は、コートで黒人アスリートと一緒にプレーした直接的な経験が、黒人のスポーツにおける優位性の認識を強めたと強調している。

A9、学内バスケットボールのコートで定期的にプレーしていた大学生だった彼は、日々

のプレー経験から、黒人には天性の運動能力があることを確信した。

「キャンパスには黒人の留学生が何人かいるんだけど、彼らはいつもバスケットボールのコートにいて、背が高く強くて、ほとんどみんなダンクができるんだ」。

A6は陸上競技出身のプロ・ボディビルダーだが、彼の証言はこの現象を強く説明している。彼は競技経験を振り返って次のように語っている。

「大学時代、陸上競技の大会にかなり出場したが、当時はいくつかの大会で黒人の選手と出会うことがあり、彼らに出会うと基本的に優勝の望みはなく、上位3位までは黒人の選手が占めていた。」

こうした個人的な経験は、ステレオタイプに具体的な背景を与え、抽象的な概念を超えて観察可能な現実へと導く。このようなリアル体験の影響は広範囲に及び、体力における人種差という考え方に個人的な検証を与えることになる。

## 4.2 問題② 人種はボディビルにおける個人の成功に影響を与えると思うか？

インタビューが進むにつれて、議論は質問2に及んだが、インタビュー対象者の最初の回答は、質問1での回答と非常によく似ており、当たり前の同一視が再浮上しており、そのような傾向を感じた私は、彼らのそのような同一視の根源を探ろうと試みた。

### テーマ①黒人ボディビルダーの割合

インタビュー対象者全員(14/14)が、ボディビルの大会における黒人の割合が他の人種の競技者の割合をはるかに上回っていることに容易に気づいたと指摘し、黒人は他の人種に比べてボディビルというスポーツに向いていると考えるようになった。

ボディビルの愛好家であり、ネットでボディビルの大会をよく見るというA1は、非常に率直に次のように述べた。

「中国国内のボディビル大会のレベルは十分ではないし、面白くもないので、オンラインで海外のボディビル大会を見ることにしている。」

同様に、フィットネストレーナーのA8は、黒人のボディビルダーがこのスポーツに向いていると考え、中国人のボディビルダーと比較しているようだ。彼はこう指摘する。

「Mr. オリンピアが一番よくわかる。世界中から最高のボディビルダーが集まるし、少なくともここ数年の結果を見ると、黒人のボディビルダーが大多数を占めている。」

プロのボディビルダーであるA14も同じ事実を指摘し、次のように主張している。

「陸上競技とバスケットボールに黒人が多いように、彼らはその分野で才能がある。」

対象者たちの回答から明らかなように、黒人はボディビルの才能があると信じている。インタビューによって明確に表明されたこの見解は、本研究に代表される中国のボディビル・コミュニティにおける特殊な視点を浮き彫りにしている。

## テーマ②リアル競技の経験

一方、ボディビルの競技経験を持つ回答者 A6、A11、A12、A13、A14 は、実際の競技経験をもち、この問題についてより深く洞察を提供できる。

そのうえで、実戦経験のある競技ボディビルダーは、より詳細な洞察を示している。例えば、A13 は筋肉の組織における具体的な違いを強調している。「黒人のボディビルダーは背中中の筋肉が著しく異なる。競技では、彼らの背中中は非常に幅広く、細長く見えたが、これは中国人ボディビルダーには当てはまらなかった。」

同様に、女性ボディビルダーA12 は、脚と臀部の筋肉の発達に注目している。彼女は、「黒人のボディビルダーは、初心者であっても臀部の筋肉が発達しているのが普通で、それが特に競争力を高めている。また、脚の筋肉も自然に発達している傾向がある。」彼女の主張はさらに、黒人のボディビルダーは、特に筋肉量の点で、ボディビルの成功に不可欠な、ある種の自然な身体的優位性を持っていることを示唆している。

A6 が黒人のボディビルダーと競い合った経験は、この見方をさらに裏付けている。彼が参加したボディビルの大会を振り返って、「ある大会で、チェックイン・ゲートで黒人のボディビルダーに会ったが、彼の背中中の筋肉のパターンは私とはまったく違っていた。」と言った。

ボディビルの競技経験がある A6、A11、A12、A13、A14 の回答者は、黒人のボディビルダーは、背中中の筋肉が広く、脚が筋肉質であるなど、特徴的な身体的特徴を持っている傾向があり、それがこのスポーツにおける長所であると認識されていることを観察した。彼らの洞察によれば、プロのボディビルダーでさえ、彼らの直接的な競技経験に基づき、黒人選手がボディビルというスポーツにおいて自然な身体的優位性を持っていることに同意している。

しかし、インタビュアーが進むにつれて、プロのボディビルダー特有の視点が浮かび上がってきた。

### 4.3 挑戦

「彼らは確かにナチュラル・ボディビルダーだが、挑戦することはできる。」—A11

ボディビルにおける薬物使用に対するプロのボディビルダーたちの見解は、このスポーツの重大な側面を明らかにしている。これらのアスリートは、黒人ボディビルダーの生来の才能を認めつつも、ハードワーク、戦略的トレーニング、食事、そして主要なパフォーマンス向上薬の使用によって、フェアプレーが達成できると信じている。このアプローチはリオカフトのような専門家の見解と一致する。彼は、ボディビル文化はステロイドの使用によって大きく発展し、ボディビルダーに肉体の完璧さを達成する無限の可能性を与えたと主張する。この場合、ステロイドは歪みとはみなされず、むしろ個人の遺伝的の可能性の論理的延長とみなされる。

A11 ボディビルの大会で長年の経験を積んだインタビュアーが、「私がトレーニングしていたジムに、初めてジムに入ったとき、信じられないような脚の筋肉を持ち、体脂肪の

少ない黒人男性がいた。でも、彼が無敵だとは思わなかった。ボディビルは才能だけではない。適切なステロイドを使えば、誰でも驚異的なプロポーションを手に入れることができる。

ボディビル初心者のプロ・ボディビルダー、A14によれば、「ステロイドは競技場を平らにしてくれる。ステロイドを使えば、自然の限界を超えることができる。それは筋肉の細部を完璧にすることであり、人種の才能だけでは達成できない。十分な努力をするには、トレーニングの面でも薬物の面でも、絶え間ない努力が必要なのだ」。

これらの見識は、人種的な遺伝的優位性は存在するものの、薬物の使用や厳しいトレーニングによってそれを凌駕したり、同等にしたりすることができるというボディビル界のコンセンサスを反映している。この視点は、自然な身体的優位性という伝統的な見解に挑戦し、ボディビルにおける卓越性の基準を再定義するものである。

## 第五章 結論と考察

本研究は、中国におけるボディビルの多面的な世界を掘り下げ、特に人種的ステレオタイプとその影響力の相互作用に重点を置いている。調査結果の中心は、「黒人神話」が広く受け入れられていることであり、黒人選手はボディビルにおいて本質的に有利であるという信念である。このステレオタイプは、世界のスポーツ界の意識に深く埋め込まれ、インタビューした中国人ボディビルダーの認識にも反映されていた。しかし、この研究はより複雑な物語を明らかにした。中国人ボディビルダーたちは、黒人アスリートの生まれつきの長所を認めながらも、その長所だけをスポーツでの成功を決定する要素とは考えていなかった。その代わりに、彼らはニュアンスの異なる視点を採用し、ボディビルの成果は、集中的なトレーニング、厳格な食事管理、そして決定的なことに、パフォーマンス向上薬の戦略的使用など、さまざまな要因が組み合わさった結果であることを認識していた。

この研究は、ボディビル文化、特に身体強化薬の使用における大きな変化を明らかにしている。かつては競技のために一流のボディビルダーだけが使用していたステロイドの使用が、今では広く組織的に行われるようになったというクラインの観察は、この文化的変化を示している<sup>34</sup>。今日、ステロイドのような薬物を服用することは、エリート・ボディビルの水準を目指す多くの人にとって、ほとんどファッションナブルになっている<sup>35</sup>。この傾向は、ボディビル業界におけるより深い変化を反映している。外部者が抱く歪んだステレオタイプに反して、ボディビルにおける薬物使用は、内部者には合理的で論理的なものとして受け止められている。それは、今日の競争的なボディビル環境の要求に対する必要かつ教育的な反応であり、効率性とパフォーマンスの最大化をますます重視する文化に合致するものとみなされている。

ボディビルの文脈では、強化薬の使用は単に受け入れられているのではなく、教育された必要な行為として合理化されているのだ。この視点は、このスポーツの薬物使用に対する外部からの無知や敵意とはまったく対照的で、ボディビルの主流文化の一部である。モナハンが論じているように、ボディビルダーは薬理学の洗練された知識を持ち、自分たちを有能なリスク管理者とみなしている。ボディビルダーが薬物の役割をどのように認識しているかの変化を反映している。薬物の使用は、道具的かつ科学的であり、今日の競争の激しいボディビル界で成功するために必要な強化であると考えられている<sup>36</sup>。

中国のボディビル界で「黒人神話」が受け入れられていることは、パラドックスを提示している。一方では、特定の身体的特徴や能力を特定の人種集団に帰属させる世界的な物語を認め、身体能力を人種と結びつける社会的傾向を反響させている。その一方で、ボディビルにおける黒人アスリートの先天的な強さは、献身、鍛錬、そしてステロイド使用のような強化技術によって匹敵し、あるいは凌駕することができると示唆することで、この物語に挑戦している。この視点は、ボディビルにおける人種的優位の概念に立ち向かうだけでなく、このスポーツにおける卓越性と成功の基準を再定義する。ボディビルにおける成功とは、先天的な身体能力だけでなく、努力とリソースの戦略的な活用でもあるという、中国人ボディビルダーたちのニュアンスに富んだ理解を浮き彫りにしている。

<sup>34</sup> Klein, A.(1993) Little Big Men: Bodybuilding Subculture and Gender Construction. Albany: State University of New York Press

<sup>35</sup> Agger, McBrier, and Danahay.

<sup>36</sup> Liokaftos.

この研究はまた、身体強化薬の使用とボディビルにおける自然な能力の概念との間の複雑な関係を浮き彫りにしている。中国のボディビルダーは、人種的ステレオタイプに挑戦するために薬物に頼ることで、黒人アスリートの身体的優位性が認識されていることを認めると同時に、その優位性は外部的手段によって匹敵または上回ることができると主張している。この二重の認識と人種的ステレオタイプへの挑戦は、内在的能力、集中したトレーニング、戦略的強化の融合として、ボディビルにおける成功のニュアンス理解を強調している。しかし、これらのボディビルダーは、黒人アスリートの身体的優位性に積極的に挑戦する一方で、そのアプローチは逆説的に、彼らが争うことを目的とするステレオタイプを強化することに貢献している。この複雑なダイナミクスは、ボディビルにおける人種的な優位性を克服しようとする努力が、彼らが解体しようとする概念そのものをうっかり支持してしまうことを明らかにしている。

皮肉なことに、中国人ボディビルダーが厳しいトレーニング、厳しい食事制限、薬物使用を通じて人種的優位性を克服しようとする努力は、意図しない結果を招いている。競争の土俵を平らにしようとする一方で、彼らは黒人の身体的優位という概念を不注意にも強化してしまうのだ。人種的ステレオタイプに挑戦することを意図した彼らの激しい取り組みと戦略的な薬物の使用は、結局、彼らが否定しようとするステレオタイプそのものを正当化することになる。この状況は、ボディビルにおける人種的ステレオタイプに挑戦するという行為が、逆説的にステレオタイプを永続させるという複雑なダイナミクスを生み出している。これは、特定の身体的特徴や能力を人種集団に帰属させようとする、より広範な社会的傾向を浮き彫りにするものであり、グローバルなスポーツ文化にもローカルなスポーツ文化にも深く根付いている信念である。

結論として、本研究は中国のボディビル界における身体強化薬の役割に光を当て、これらの物質が正常化され合理化されている微妙な状況を明らかにした。このような薬物の受容と戦略的使用は、人種的ステレオタイプへの挑戦だけでなく、ボディビルの規範と基準の再定義をも反映している。この調査結果は、人種的ステレオタイプがこのコミュニティの中で複雑に絡み合い、しばしば矛盾する方法を明らかにしている。人種的ステレオタイプに対抗しようとする努力は明らかであるが、それは不注意にもその持続を助長している。本研究は、スポーツにおける人種、競技力、文化的認識の間の複雑な相互作用についての理解を深め、ステレオタイプとスポーツパフォーマンスの間の微妙で矛盾した関係についてユニークな視点を提供するものである。また、ステレオタイプがパフォーマンスに与える影響は、異なるスポーツや文化的背景によって大きく異なる可能性があることを示唆しており、この分野におけるさらなる研究の必要性を強調している。

この研究が終わりに近づくにつれ、この研究の範囲と、この研究が置かれているより広い文脈を振り返ることは重要である。修士課程の研究プロジェクトとして、本研究は中国のボディビルにおける「黒人神話」という複雑で微妙なトピックの最初の探求を提供した。この探究は、貴重な洞察を提供するものではあるが、対話の始まりに過ぎず、終わりではない。

本研究は、中国のボディビル・コミュニティから深く詳細な視点を提供する質的研究手法に依拠している。しかし、このアプローチでは、当然ながら調査結果の幅と一般性には限界がある。収集された洞察は、調査対象となった個人と文脈に特有のものであり、より大規模で多様な環境におけるスナップショットとみなすべきである。そのため、ここで導き出された結論は、予備的なものであり、さらに広範な研究のための土台を築くものと見なすのが最善である。

人種的ステレオタイプとスポーツパフォーマンスの文脈におけるパフォーマンス向上

葉の役割もまた、さらなる研究に値する問題である。この研究領域は、倫理、フェアプレー、スポーツマンシップに対する認識の文化的変遷など、より広範な問題を含んでおり、今後の研究においてさらに深く掘り下げられるに値する。

さらに、異なるスポーツや文化的文脈におけるステレオタイプ脅威理論の適用も、引き続き探求されるべき領域である。中国のボディビル・コミュニティで観察された人種的ステレオタイプに対するユニークな反応は、ステレオタイプ脅威効果の普遍性と多様性について疑問を投げかけている。

まとめると、本研究は限られた範囲ではあるが、人種、文化、運動能力に関する議論に重要な視点を提供するものである。この論文で得られた知見と観察が、これらの複雑かつ重要なテーマに対する理解を深める、より包括的な研究のきっかけとなることを願っている。

## 引用・参考文献一覧

Agger, Ben, Debra McBrier, and Martin Danahay, 'A CRITICAL SOCIOLOGY OF BODYBUILDING', 113

Aoki, Douglas Sadao, 'Posing the Subject: Sex, Illumination, and "Pumping Iron II: The Women"' , 2023

Azzarito, Laura, and Louis Harrison, 'White Men Can't Jump': Race, Gender and Natural Athleticism', *International Review for the Sociology of Sport*, 43.4 (2008), 347-64

Baker, J., Horton, S, 'East African running dominance revisited: A role for stereotype threat?' ,*BMJ Publishing Group Ltd & British Association of Sport and Exercise Medicine*, 37(2005),553-555

Brown, Jeffrey A., 'Comic Book Masculinity and the New Black Superhero' , *African American Review*, 33.1 (1999), 25

Cereda, Ferdinando, 'Transforming Bodies, Transforming Society: The Cultural Impact of Fitness' , *PEDAGOGIA OGGI*, 21.1 (2023), 272-79

Coakley, J. (2001) *Sport in Society* (Boston, MA, McGraw-Hill).

Czopp, Alexander M., and Margo J. Monteith, 'Thinking Well of African Americans: Measuring Complimentary Stereotypes and Negative Prejudice' , *Basic and Applied Social Psychology*, 28.3 (2006), 233-50

Dyer, R. (2017) *White: Twentieth Anniversary Edition* London & New York: Routledge

ENTINE, J. (2000) *Taboo: Why Black Athletes Dominate Sports and Why We're Afraid to Talk about it.*

Fair, John D., 'Eugen Sandow and Eugenics' , *Sport in History*, 2023, 1-22

Fair, J.D. (2015) *Mr. America: The tragic history of a bodybuilding icon United States: University of Texas Press*

Gavigan Peter:'Whose body is it anyway? 'Race', Gender and Representation in Bodybuilding' (2022)

Harrison, Keith C., and Suzanne Malia Lawrence, 'College Students' Perceptions, Myths, and Stereotypes about African American Athleticism: A Qualitative Investigation', *Sport, Education and Society*, 9.1 (2004), 33-52

Harpalani, Vinay. (2004). Genetic, Racial and Cultural Determinism in Discourse on Black Athletes: A Critique of Entine's Taboo and Hoberman's Darwin's Athletes.

Hodge Samuel R. et al, 'A Comparison of High School Students' Stereotypic Beliefs about Intelligence and Athleticism', *The Journal of Educational Foundations*, Ann Arbor Vol. 22, Iss. 1/2, (2008): 99-119

Kerr, Ian B, 'The Myth of Racial Superiority in Sports', 2010

Klein, Alan M., 'Pumping Irony: Crisis and Contradiction in Bodybuilding', *Sociology of Sport Journal*, 3.2 (1986), 112-33

Klein, A. (1993) *Little Big Men: Bodybuilding Subculture and Gender Construction*. Albany: State University of New York Press

Liang, Kelly, and Philippe Le Billon, 'African Migrants in China: Space, Race and Embodied Encounters in Guangzhou, China', *Social & Cultural Geography*, 21.5 (2020), 602-28

LI Li -yan, 'Human Races and Physical Activities', *The Scientific Research Office, National Head Bureau of Physical Education*, (2001)

Liokaftos, Dimitrios, 'From "Classical" To "Freaky:" An Exploration of the Development of Dominant, Organised, Male Bodybuilding Culture', 253

Murtha, Ryan, Conor Heffernan, and Thomas Hunt, 'Definition Diets and Deteriorating Masculinity? Bodybuilding Diets in Mid-Century America', *Global Food History*, 7.1 (2021), 71-91

Pang, Bonnie, Denise Tse-Shang Tang, and Siufung Law, 'Trans\*, Female Bodybuilding and Racial Equality: Narratives from a Hong Kong Chinese Gender-Fluid Bodybuilder', *Sport, Education and Society*, 2022, 1-13

Sautman, Barry, 'Anti-Black Racism in Post-Mao China', *The China Quarterly*, 138 (1994), 413-37

Schippert, Claudia, 'Can Muscles Be Queer? Reconsidering the Transgressive Hyper-Built Body', *Journal of Gender Studies*, 16.2 (2007), 155-71

Jane P. Sheldon, 'White Americans' Genetic Explanations for a Perceived Race Difference in Athleticism: The Relation to Prejudice toward and Stereotyping of Blacks', *Athletic insight: online journal of sport psychology*. 9.3(2007): 31-56.

Stokvis, Ruud, 'The Emancipation of Bodybuilding', *Sport in Society*, 9.3 (2006), 463-79

Stone, Jeff, 'Battling Doubt by Avoiding Practice: The Effects of Stereotype Threat on Self-Handicapping in White Athletes', *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28.12 (2002), 1667-78

Stone, Jeff, W. Perry, and John M. Darley, '“White Men Can't Jump” : Evidence for the Perceptual Confirmation of Racial Stereotypes Following a Basketball Game', *Basic and Applied Social Psychology*, 19.3 (1997), 291-306

Stone, Jeff, Mike Sjomeling, Christian I Lynch, and John M Darley, 'Stereotype Threat Effects on Black and White Athletic Performance'

Woods Clinton, *Perceptions of College Students on Race and Stereotypes in Athletics*, Northwest Missouri State University, 7 (2013), 4-50.

Wyke Maria, 'Herculean Muscle! : The Classicizing Rhetoric of Bodybuilding', *A Journal of Humanities and the Classics*, 4.3(1997), 51-79

潘玉环,《浅谈黑人体育文化》,天津师范大学体育科学学院, (2013)

# 謝辞

初めてジムに入って、あのいまましいバーベルを突き上げたとき、こんなにも美しい世界に出会えるとは思ってもみませんでした。

スポーツを愛することから、スポーツを学ぶことへ、何よりもまず、川島先生に感謝したいのは、生活面でも学業面でも、いつも忍耐強く私を支えてくださったことです。メールへの速やかなお返事、厳しくも的確なご指摘やご批判は、私の背中を押してくれました。

副査の石井先生にも、感謝いたします。石井ゼミも川島ゼミもとても温かく迎えてくださるファミリーで、ゼミでのディスカッションでは歴史研究のあらゆる側面について学ぶことができ、大変勉強になりました。

また、副査の杉山先生は、学生1年目の舞踊鑑賞の先生でしたが、ボディビルにとって「美」と「鑑賞」は常に外せないキーワードであり、舞踊鑑賞の授業は、ボディビルというスポーツを、筋肉の大きさ、筋力、筋肉量ということ以上に、より専門的で細かい視点から見る機会を与えてくれました。

また、学術発表の機会を与えてくださった日本人類学会と NASSH に感謝いたします。引用文献の名前を実際に目の前にすると、この上ないモチベーションが湧いてきて、言葉では言い表せません。そして、NASSH は私にとって素晴らしい出会いを開いてくれました。

また、この論文に熱心に協力してくださったインタビューの方々にも感謝の意を表したいと思います。お一人お一人が素晴らしいエピソードをお持ちで、考え方も深く、全く異なる自立した方ばかりで、それぞれのお話を論文で紹介することに限界があり、申し訳なく思っています。

また、両親が近くにいないにもかかわらず、ずっと私の味方でいてくれたこと、そして遠く離れているにもかかわらず、私の学業を最後まで支えてくれたことに感謝したいと思います。

最後になりましたが、美しい恋人 張一、早朝に見たリンカーン記念館、霞む山中湖、青い鎌倉、花火が咲き乱れる東京競馬場、美しい軽井沢、まだまだたくさんあります。

カピバラ Capybara